

書評

小林泰三著

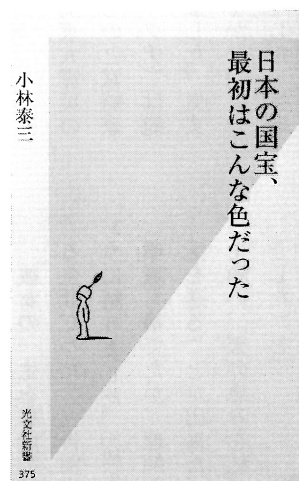
『日本の国宝、最初はこんな色だった』

光文社新書、2008年10月初版第一刷

1,000円

経営ビジネス学科

橋富 博喜



いつだったか、鑑真和尚のお寺唐招提寺金堂の修復工事の様子がTVで放映されたことがあった。見るともなしにぼんやりと見ていたのだが、そのなかでひとつ目を留めた箇所があった。それは金堂扉の修復に関わるところで、現在ほとんどの色彩が剥落し、わたくしたちには親しみ深い色調になっているところに、扉のひとつの金具を外したところ金堂創建当時を思わせる色鮮やかな文様が出現したシーンであった。茶褐色や灰色の、モノトーンに近いイメージを思い起こさせる寺院の建築に、これほどまでに明るい色彩が用いられていたことがあらためて認識された。そういうえば、かつて韓国を旅行し海印寺を訪れたとき、一部になおのこる明るい色彩に、日本の寺院もかつてそうだったんだろうなと感じたこともあった。わびとかさびとかいう世界にどっぷりつかって、そこで用いられる色彩がわが国独自の色の使い方であるかのような錯覚をしていたのかも知れない。

本書はわが国に伝わる文化財を、最新のデジタル技術で復元しようとした著者の足跡を、わかりやすく記したものである。ここに登場するのは、東大寺大仏殿、地獄草紙、平治物語絵巻、檜図屏風、花下遊楽図屏風など、いずれもわが国の文化財としてひろく人口に膾炙しているものである。こうした名品を、さまざまな角度から検証しながら、細かいデジタル技術を駆使しながら復元をすすめていく。あたかも推理小説のなかの探偵が、ひとつひとつの事実を積み上げながら解決していくように、色彩の再現につとめていく。その作業の詳細をみるのは「第五章

醍醐の花見にお邪魔します 花下遊楽図屏風」がわかりやすい。狩野長信筆と伝えられる本作品は、関東大震災によって右隻の中央二扇が失われてしまった。著者は、戦前のモノクロ写真と偶然発見された模写の作品とを参考に、女性の着物、それに附属する文様などの復元に取り組む。さらに本書では、「参加する視線」という観点から、屏風や襖絵の見え方（それらが部屋のなかでどのように飾られていたか）についても論じていく。屏風の見方については私にも考えていることがあり、それとは若干異なる点もあるが、おおいに参考になる。

ところで私は、自らの研究領域として美術を選んだ。平面の作品であればそれが、色彩と線と構図によって成り立っていることは知っている。この三つの要素をしばしば講義のなかで語っていくのだが、そのときもとても不安になるのが色彩に関して語るときである。というのも、講義のなかで映し出すスライドは、その多くが写真撮影され印刷された書物の画像を、スキャナーでパソコンに取り込み、それをプロジェクターで映写するという二重、三重にもフィルターがかかっている画像だからである。もちろんそういう過程を経ない実物を撮影したスライドでもカメラのレンズ、記憶媒体などいくつかのフィルターをおとして教室で映し出されている。それに加えそもそも自分が見た色、見てきた色彩が本当の色なのかどうか、まったく自信がない。

印象派のモネの例を引き出すまでもなく、私たちに見えるものの色は、光のなかでどんどん変化していく。そうした曖昧さを、学生たちに講義のなかでたくさん言葉をつかって語っている。学生たちが文化の学問のこうした一端を、私の話のなかに感じてくれたらいいのだが。

